

第2回小城市総合計画審議会 議事要旨

日 時 令和6年6月28日（金）14時00分～15時45分
場 所 小城市役所 西館2階 大会議室AB

- 出席委員：五十嵐会長、吉岡副会長、林委員、御厨委員、下村委員、加野木委員、井手委員、池上委員、江頭委員、横尾委員、森川委員、徳丸委員、圓城寺委員
(欠席委員：木原委員、秋丸委員、中島委員、藤井委員)
- 事務局：池田総務部長
(企画政策課) 大坪課長、田中副課長、森係長、久保田主事
- 傍聴者：3名

1. 開 会

2. 委員の委嘱

3. 議 事

(1) 小城市の現状（人口・統計データ等）について

(委員A)

資料3 農業産出額の推移について。農家数の減少の要因として考えられることは。

(事務局)

一つの要因として、農業を営む方が減っているのと、年齢的にも高齢の方が多いというところが考えられる。今年度実施される農林業センサスの結果等も踏まえ、分析をしていきたい。

(会長)

同様に、2005年の2102戸から、2010年には974戸とわずか5年間で半分以上に減っているが、これは農家数なのか農業経営体数を指すのか。漁業についても同様に、魚家数なのか経営体数なのかというところについては確認をお願いしたい。

(委員B)

各種統計情報について。細かい数字ではなく、旧町毎の動向や特性など、何か分析できているものがあれば教えていただきたい。

(事務局)

後ほど説明を行う市民アンケート結果の中でも地区別の分析結果についてはお示ししているが、人口移動という点では、三日月町では、比較的子育て世代の年齢層の人口増が続いている状況である。年ごとにばらつきはあるが、ほかの3町について

はプラスの年もあれば、マイナスの年もあるという点で一つ特性としてはそういったところがある。

(会長)

旧町単位での統計の取り方や特色を示すデータ、場合によっては三日月町のような住宅地の開発が進んだところなんかを想定すると、小学校区単位でのデータの分析等も、都市計画を考える場合には必要になってくる。アンケートの地域別の満足度等も参考にしながら検討していただきたい。

(事務局)

令和6年度に人口ビジョンの改定を予定しており、その中で小学校単位での分析等もできればと考えている。分析結果については、審議会の説明を行っていききたい。

(委員C)

資料3 農業産出額の推移について。統計的に見れば、要するに生産者が少なくて売上が上がった状態で一見非常に良いと感じられるが、小城市の生産者、特に農業生産者は年々減っており、この辺りの対策も人口の増減に影響してくるところであるとする。その点について会長のご意見をお聞きしたい。

(会長)

いわゆる農家数、漁家数が減少するという問題と、1戸あたりの経営規模が拡大するという側面、両側面で考えていく必要があるかと思う。農業で言えば、比較的規模の大きな認定農業者の動向であるとか、海苔養殖であれば協業体毎の業績であるとか、そういった問題にも関わってくる。農業漁業等を検討する場合に今いただいたご意見は十分配慮していくべき問題である。

(委員D)

小城市の人口動態における社会増の要因のうち約40%が外国人の影響とあるが、今後の動向をどうみるか。外国人の影響ということは、何年か経つとまたこれが減少になってしまうのか。現時点で何か分析ができていれば説明をお願いしたい。

(事務局)

令和5年前の社会増の要因としては、約40%が外国人の影響ということで、ここ近年見てもコロナ禍以外は一定数外国人の影響があったものと考えている。また、昨年は若年層の社会増が増えているが、これがどこまで続くのか、またその要因について分析ができていないため、計画策定の過程の中で分析をしていきたい。

(会長)

在留資格別の外国人の推移をみても技能実習生が多いことが見てとれるが、製造業関係が多いのか介護職関係が多いのか、業種の分析はできているのか。

(事務局)

業種の分析まではできていない。

(会長)

技能実習生の制度は今後変わっていくことが想定されており、外国人の労働力確保が大きな流れになっていく中、外国人が現に小城市に居住し暮らしていくため、そういった外国人の方との共生の在り方や、コミュニティの在り方等は一つ重要なテーマになってくる。

(会長)

他市と比較したときの小城市の特性は、県内で一番昼夜間人口比率が低いところにあるのではないかと。住宅都市として発展していくのか、昼間人口を増やすことに重点を置いた施策を検討するのか、この辺りは将来のまちの在り方を考えるうえでひとつ重要なポイントになってくる。

(2) 市民アンケート結果及びまちづくり市民会議の報告について

(委員B)

アンケートの取り方について。小城市独自の方式なのか、他市町と同様の方式によるものなのか。

(事務局)

市独自で項目・対象者数を設定しており、県内一律ではない。他の自治体でもアンケートは実施されているが、愛着度など項目に大きな違いはない。また、傾向として、近年 Web でのアンケートも増えている。アンケート結果については、地域別・性別・年齢別の分析をする際にはぜひ参考にしていきたい。

(会長)

市民会議の参加者の属性をみると、10代が一番多く、比較的若い世代の方が参加されている。一般的にアンケートは、若い世代の人たちの回答率が低い。今後、総合計画を作っていく上で、若い人たちの考え、意見をどのように反映するかという点でも、この市民会議は重要な役割を担っていると考えられる。市民会議は、昨年に引き続き、今年度も予定されているということなので、本審議会と同時並行で進めていただきたい。

(3) 第3次小城市総合計画基本構想骨子案について

(事務局)

これからテーマ毎に政策を立て、基本計画を策定していくが、全体を象徴するまちづくりの方向性として、文章一行でどのように表現をするかというところで、事務局案として5案をお示ししている。今回の審議会の中で、どれか一つに絞るということを前提にはしていないが、まずは5案に対し率直なご意見をいただき、集約、再編も行いながら最終的に決定していきたい。

(委員C)

目指すまちのすがたの5案には、「福祉」のキーワードがどこにも出ていない。少子高齢化社会において「福祉のまち」、「高齢者が元気に暮らしていけるまち」といった視点も必要だと思うが、その点についてはどのように考えるか。

(事務局)

5案の中では、「福祉」というワードで表現していないが、案4の「若者から高齢者まで全世代が元気で暮らせるまち」、そういった目指すまちのすがたから「福祉」というところへの繋がりを表現している。また、福祉分野については、現行の第2

次総合計画では「高齢者の福祉の充実」として施策の中で整理している。第3次総合計画においても、高齢者あるいは福祉という分野は一つのテーマに相当する重要な内容であると考え、一行で集約する場合に、「福祉」という言葉をどこまで踏み込んで表現するかという点については、引き続き議論していきたい。

(委員E)

市民会議の方にも出席し、若者の意見を聞く中で、デジタルをいかにして取り入れていくかというところの重要性を感じた。歴史、文化などの資源とともにデジタルとの融合という視点も取り入れていただければと思う。

(会長)

現案はすべていわゆる日本語での表現だが、横文字は使わないほうがいいのか。また、市民幸福度を示すキーワードとして、近年では **Well-being** という表現がよく用いられるが、第3次総合計画の中での位置づけについても検討していただきたい。

(委員F)

目指すまちのすがた（案）の4番目に、「若者」という表現があるが、どの年齢層のことを指しているか。

(事務局)

明確な定義はないが、人口戦略会議の話の中で、若年女性人口は20歳から39歳までとされている。小城市に限った話ではないが、高校を卒業するタイミングで進学や就職等で市外へ出ていくケースも多いことから、高校卒業頃からというところで、おおよそ20歳から子育て世代の39歳ぐらいの年代をイメージし「若者」と表現している。

(委員F)

高齢化が進む一方でやはり少子化という部分もある。高齢化社会を支えていくのはやはり若者であり、高校生に至るまでの0歳児の段階から愛着を持った子どもたちが育っていくということが一番大事なのではないかと感じていて、「若者」というよりも、「こどもから」と言葉を変えるといいのかなと思う。こども家庭庁ができて、こども真ん中プロジェクトとして子どもの意見も聞きましょうという社会になってきているので、子どもが生まれたときから、あるいは母親のお腹にいる時から子育てがしやすい環境にあることで、その子が小城市のことを好きだなと思いながら育っていくというのがこれからの時代大事になってくるのではないかと。

(委員G)

第2次総合計画の将来像は、「誇郷幸輝 ～みんなの笑顔が輝き幸せを感じるふるさと小城市～」と、「小城市」というワードが出てきているが、5案ではすべて「まち」と表現されている。できれば「小城市」という言葉を入れていただいた方が、市民にはイメージが湧き、より目指すべきまちの姿に近づくのではないかと。

(委員A)

スローガンに一见含まれなくてもやるべきことというのはその下の柱に含まれると思うので、今後10年で小城市として一番力を入れるべきところがどこなのかと

いうところ、市の戦略的なものが一番頭のスローガンの中に見えるほうがよいのではないか。

(事務局)

現行の第2次総合計画では、施策分野のなかに重点的に取り組む内容として重点施策というものを設定しており、後期基本計画では、「防災・防犯」がそれに該当する。第3次においても、市として何を重点的に推進していくのかという議論については、これから基本計画の策定を行うなかで基本構想との繋がりも意識しながら議論すべきことであると考えます。

(委員H)

先述の意見と重なるが、市の目指すべきすがたは、具体的な施策や取り組みにつながる表現であるべきではないか。例えば、案1や案3では、「好き」や「誇り」、「笑顔」といった、直接事業とは結びつきにくい表現になっているという点で、具体的に何をどう目指していくのかというところが分かりにくい。

(事務局)

総合計画の作りとして、まず市の将来像というのが計画の1番頭にきて、その下に子育て、教育、福祉といった各分野の政策に分かれている、そこからさらに、具体的な取り組み事業というピラミッドのような構造になっていることから、一番上の将来像が直接事業に結びつく表現というのは、少し難しいものがある。今後、政策や施策、基本事業の取り組み内容等を議論する中で、将来像との整合がつかないところがあれば、また立ち返って議論する形になる。

(会長)

今すべての政策が結果として自信あるいは誇り、笑顔につながることを目的にするというような基本的な考え方を元に行っているに過ぎないことなので、このことを議論し続けてもなかなか落とし所がないというのが正直なところだと思う。どのような表現にするかというのは、今後継続して検討を行う必要があるが、キーワードとして、アンケートや市民会議での重要なキーワードとしての「誇り」であるとかを全体を象徴する文章の中に入れたいというのが事務局の考えであり、今後10年間の小城市の目指す将来像のキャッチフレーズは、それくらいの位置づけでまとめる方向で検討していただきたい。

(委員B)

現行の計画の将来像である「誇郷幸輝」が何を表しているのかというのがこの4文字だけでは少し分かりにくい部分があったので、それが今回の計画では、非常にわかりやすい言葉でこの5案に反映されているのではないかと感じた。私見ではあるが、基本構想としては非常にわかりやすい言葉で、それが施策に落ちていくという風な見方ができる。

(会長)

現行の4文字造語についてはどのような経緯で検討に行きついたのかもがあるが、目指すべき将来像としての文章があって、さらにそれを造語4文字で表しているようなもので、逆に何となく分かりにくいという気がしなくもない。

(委員 I)

まちづくり市民会議に参加した生徒の意見として、参加する前は緊張しながら参加した生徒も、大人の中で話をして自分の意見もちょうんと聞いてもらえたと喜んで帰ってきた。高校生を始め、中学生などの若い世代を受け入れ、同じレベルで意見を出し合い、まちづくりについて話し合っていくというところが小城市の本当にいいところだと生徒の声から感じたところである。一つ一つの文言をどうこうということではないが、やはりいろんな年代や多様な個性を持つもの同士が共に生きていく、暮らしやすいまちというのが一番表にまわって一つ出てくると非常に嬉しいなと思う。

(会長)

本来、地域づくり、まちづくりというのは常時こういう市民参加型の計画づくりというのが今後も当然あって然るべきだと思う。市民参画や協働はこれからもますます重要になってくるものであり、「みんなが主役」というキーワードはおそらく市民のそういった意識から生まれているものとも理解できる。市民が積極的に参加できるまちづくりをこの機会に絶えず持つような仕掛けは今後必要であると感じる。

4. その他

次回、第3回審議会は、令和6年8月5日（月）9時半からを予定。

5. 閉会

【配布資料】

- 資料1 小城市総合計画審議会委員名簿
- 資料2 第3次小城市総合計画策定スケジュール（R6.6月現在）
- 資料3 小城市の統計情報について
- 資料4 小城市の人口動態について
- 資料5 第3次小城市総合計画市民アンケート調査結果報告書
- 資料6 第3次小城市総合計画まちづくり市民会議報告書
- 資料7 第3次小城市総合計画基本構想骨子案について